

【概要】

聞き取り日時：2025年7月7日 10:30 から 12:30@コンセールのと1F

聞き取り対象者：森進之介（能登町定住促進協議会：事務局次長・移住コーディネーター、金沢出身）

池崎万優（集落コーディネーター：宇出津出身）

鰻目（よめ）啓太（集落コーディネーター：松波出身）

1. 能登町定住促進協議会の事業

森氏による説明は、能登町定住促進協議会と森氏自身が被災後にどのような取り組みをしてきたのかについての説明からスタートした。森氏は、能登町定住促進協議会は「不公平な事業」を行うことができることに特徴があるという。行政であれば誰に対しても公平に事業を行わなければならないが、能登町定住促進協議会は「（定住に）来て欲しい人とそうでない人」で対応を分けることができる。このように、事業を必ずしも公平性を目指さないものへと転換させたのは、森氏が集落の方から怒られた経験によるという。

森氏は、移住コーディネータとして働き始めて3年後に、「集落にとって来て欲しい人ではない人を紹介した」として集落の人から怒られた経験を持つ。この時、移住する人数を単純に増やせば良いのではなく、「集落にとって来て欲しい人」を増やすことが大切であることを理解したという。この時から、公平性を指すのではなく、集落にとって来て欲しい人はどのような人であるのかを聞き取り、移住を希望する人とのマッチングを丁寧に行うことを心掛けるようになったという。

2. 集落ごとに異なる生活リズム

能登町には15のエリアと約190の集落があり、集落ごとに住民の生活のリズムが異なる。里海は7エリア、里山は8エリアであり、里海地域は夏祭りを中心に1年が回り¹、里山地域では春の祭り（田植え祭り）と秋の祭り（収穫祭）が中心的な行事となっている。里海地域の夏祭りは、宇出津の「あばれ祭り」（7月最初の金・土に開催）を皮切りに、毎週のように各地で祭りが催される。「あばれ祭り」はこの地域の最初の祭りであり、宇出津出身の池崎氏はそれを誇らしげに語ってくれた。

このように集落ごとに生活リズムが異なっており、定住促進事業により「集落の負担になるような人を増やすことは、良いことなのか？」と考えるようになり、それぞれの「集落にとって来て欲しい人」をマッチングすることに注力するようになったと森氏は語る。移住を希望する人が、希望する集落にマッチしないと判断した場合は、横のつながりから別の地域を紹介することもあるという。

¹「あばれ祭 Count Down カレンダー」（2024～2025年版）が作成され、宇出津地区全世帯に無償配布された。（<https://www.chunichi.co.jp/article/895052>）

3. 被災後の活動

令和6年能登半島地震については、里海地域は地震による被害が大きく、里山地域は地震による被害に加えて、2024年9月に起きた豪雨による水害の被害も大きかった。里山地域の住民にとっては、「田畑と里山がダメなら住んでいけない」という意識が強く、水害後の住民の精神的ダメージが大きく、復興に向かうことができるか危機感を持ったと、当時のことを森氏は語った。

水害後、手刈りの稲刈り農業ボランティアが里山地域に入るようになった。この農業ボランティアのコーディネートを、民間のボランティアセンターとともに森氏たちも担当した。手作業で片付けることができる流木の片付けや泥かきなどの作業がボランティアによってなされたため、現在は稲作が再開できるようになった。また、ボランティア参加者の中から、移住希望者も現れるようになり、「集落にとって来て欲しい人」を見つけることもできるようになったという。

2025年4月からは、集落再建支援を行うために集落コーディネーターとして池崎万優さんと鰺目（よのめ）啓太さんに加わっていただき、各集落の「お困りごと」「あきらめごと」をこれまで以上に丁寧に聞き取ることができるようになった²。活動してくれるボランティアについて集落の人々は、「外孫が増える」という表現で喜びを表しているとのことである。

4. この地域の特徴

発災後に森氏は、ブルーシートが必要なので集めて欲しいと被災者から言われていた。ところが、あるボランティアがブルーシートを被災地に届けたところ、そのボランティアは被災者から「ここではブルーシートはいらない」と言われたという。

このエピソードについて森氏は、「個人としてはブルーシートがなくて困っているけれども、集落としては『いらない』と遠慮したのかもしれない」と解説してくれた。つまり、明らかに本人は困っているように見えても、コミュニティとしては支援を受けることは遠慮するというようなことが、この地域では往々にして起こるのだという。このような「エリア感」を理解しないと、適切な支援を届けることは、この地域では難しいのだという。

5. 物資輸送の中継場所の必要性

地震被災後、森氏は金沢の病院に入院しながら、被災現場で必要な物資などの連絡を受け、配送を依頼するという作業に尽力していた。この時、現場の「疲れ感」に気づいたという。

支援物資は自治体には届いているものの、それを被災現場に運ぶのが大変な作業であり、それができていないので、現場では支援物資が不足していた。したがって、各町内の集会所などに支援物資を貯蔵しておけるような体制が、今後は必要であるとのことであった。

² 2024年のヒアリング調査の際に、森氏は一人でこの仕事を担当しており、「人手が足りない」という発言があった。この事態を解消するために、2名の集落コーディネーターに加わってもらうこととなった。

6. あばれ祭り

最後に、宇出津出身の池崎氏が、2024年度の「あばれ祭り」について自身の経験を語ってくれた。2024年元旦に被災し、2024年の2月には祭りをを行うか否かの議論が各集落で行われ、多くの集落が「祭りをを行う」という判断を行った³。池崎氏の集落でも祭りをを行うという判断がなされ、「(祭りが行われる) 7月まで頑張ろうという気持ちになった」と池崎氏は回想した。「祭りをを行う」ということが心の支えとなって、復興時期を乗り切ることができたというのである。

森氏、池崎氏、鰻目氏ともに、お祭りの準備から片付けまでの作業は膨大であり、「本気でないとできない」ものと捉えている。そのような、お祭りの準備から片付けまでの作業の中で「横のつながり」「縦のつながり」が生まれることから、「祭り（の準備から片付けまでの作業）はコミュニティづくり」だと池崎氏は語ってくれた。

³ この意思決定の過程は、「神様を壊す夜」というNNNドキュメントに記録されている。
(<https://www.youtube.com/watch?v=FaqZYTm1McY>)